

■（３５）被災地で学校は中核的存在です

被災地からみれば、今度は足元で、大地震が起きたような状況だった。震源地は野党と岩手県内陸を地盤とするベテラン国会議員が率いるグループ。その揺れは、震災から３カ月たっても家族を捜し続け、避難所生活続ける被災者の先行きをどれだけ暗くしたか。

東京都内の私立小学校の社会科系の先生たちの研修会で、被災地からの報道について話をする機会をいただいた。そのため乗った東北新幹線の盛岡～東京が、今回の政治の騒動で、実際の距離や時間より余計に遠く、長く感じた。

研修会の講演は、被災地からどんな思いで報道を続けていかを少しでも知ってもらえればとの思いで臨んだ。加えて被災地での学校の現状もだ。多くが避難所や仮設住宅の建設用地になっている。被災者でもある先生が、学級だけでなく避難所の運営にまで走り回る。みな疲労困憊だ。参加した先生も先生と子どもたちの「心のケア」を心配していた。

首都圏も近い将来、直下型地震が予想されている。学校はいま、災害時に何をすべきか、あらためて考え直し、備えを万全にしてもらいたい。今回の震災の教訓として（山）